水銀少年

草野 冬綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水銀少年

【Ｎコード】
Ｎ８９２４Ｐ

【作者名】
草野　冬綺

【あらすじ】
友人への餞、日常の切り抜き、退屈な思索、思考の停滞、記憶に残留した言葉……
タイトルの通り毒というか、一部人害となる性質があります。
悪気はないのですが…

長篇追加中（・ｏ・）ゞ

・ｐｉｓｔａｃｈｉｏ

・ｆｌａｔ　ｄａｙ

二十六扁終了予定

後一篇で完結.
現在完結に向け、修正中.

完結予定日　　４／～

冷雨の中での目眩

【赤い色】

息ができないから
苦しくて喉を掻きむしる

血が爪を濡らして
赤くて冷たい色をする

【そのままに青空】

青い、青い、青い色
誰かが塗り潰したみたいに
その人は何に対して
怒っていたのか

【冬の】

知っている、誰かが
死んでしまったら

泣くだろう、と思う

でも　すぐに
どうにも
ならないことだから、と
綺麗さっぱり忘れて

次の朝には
心から笑えているとも
思う

冷たい冬の空みたいに

【その意味】

街灯の明かりが
ぽつんと

空が曇れば　きっと
明るくなるだろうに

月が出れば
消えてしまっても
誰も気づかないだろうに

【最期には】

だいたいは
救われているんだ

心から　感謝してる

口に出すと
軽くなってしまいそうで
怖いから

絶対言わないし

絶対認めたりしないけれど

白い鱗と水魚の標本

【震動】

目は反らせない
まるで吸い付かれたように固定された視線

その先

可もなく不可もなく
困ったように微笑む君

【白い友人】

まったくもって奴は
透き通るような白さ

精製された上白糖とか
純白の華奢な羽とか

人間とは思えない無垢さ
通俗な世界に
馴れてしまわないうちに
早く空に帰りなよ天使

【ひとになる】

ひとを傷つけないように
息を殺し慎重に

ひとを傷つけないように
そっと
泣きそうになるほど
優しく

言葉を吐くことが
出来るひとになれればいい

【すべてを】

君のすべてが
手に入らないなら　いっそ
君の幸せを願う
たったそれだけのこと

【君と僕との違い】

泣きそうだと君は言い
泣けばいい、と
これは僕

ほらこれが
君と僕との違い

琥珀の眸　青銅の躰

【適正距離】

人は各々、独自の
適正距離を持っている

その距離を計り間違えると手酷い仕打ちが返ってくる

人懐っこいと思っていた
奴に

踏み入りすぎて
痛い目をみるのなんか

いい例だ

【既視感】

この人は
何だか懐かしい

夢を見ているような
夢から醒めたような

そんな感覚

【イコール】

君はあまり怒ったりしない泣いたりもしない

歓びもしないし
笑ったりもしないけれど

君という人について考える

君という人はいつだって
不機嫌で不健康
欠伸ばかりしている

そんな君の傍にいるから

すっかり不健康で不機嫌になってしまっていた

【青銅の躰】

硬質で冷ややか
ざらつきさえ素っ気ない

鉛のように
気を失って　凭れかかる

心地良さとは
ほど遠い

けれど　口から漏れるのは安堵のため息

【空アオイ】

瞬間、

頭が燃えたぎるように
熱くなった

憤慨　不快　恐慌

衝動のまま
傷つけ　踏みにじり
傷口さえ抉りながら

時に笑っていたような
気さえする

瞬間的に
生きるという行為は
あまりにも
周囲を傷つけ過ぎて

救いようのない自分を
噛み締めながら

空を仰ぐ日々

薄命な灯心蜻蛉

【此の花咲くや】

春になったら
君が呟き

どうかな　　駄目かも
僕が呟いた

咲くよ
君がまた呟き

そうかな
僕がつられて呟いた

萎れかけた　花束を
見つめる幼い君

君が早く大人になることを望んでいるようで
望んでいない僕

【砂糖菓子】

甘い　甘い
甘過ぎる

舌先が痺れるような
目眩でその場に
崩れ落ちてしまいそうな

そんな甘さには
吐き気しか感じない

心地良くなんて
感じてしまったら

それは　もう
手遅れだろ

【雪】

雪が熔ける
その瞬きの間に

恋をして
諦めた

誰だか
名前も思い出せない
顔見知りが

言っていた

あんたはさ　恋とか愛とかないよな　向いてない

別にないわけじゃないさ
お前とは違って
自制心が強いだけで

その後どんな言葉が
返ってきたかなんて

思い出せない

ただ
ああ　確かに
無いだろうな、と

気怠い諦念と共に

けれど　もし次に
誰かに惹かれることが
あれば

あったなら次は
自制なんて
効かないだろうな

そんな予感

無惨な赤い翅

【ある日】

ある日　　ふと
思ったんだ

君は僕の何処が
好きなんだろう、て

僕は君の何処が
好きなんだろう、て

その時　　気づいたんだ

僕は君を好きなはずで
君は僕を好きなはずなのに

どうしてか

どうでもよくなっていた
君が嫌いになったわけじゃない
他に大切なひとが
出来たわけでもない

君のことは
他人よりも　身近に感じる
でも　大切なひととの
距離感じゃ
なくなっていたんだ

ある日の昼下がり
気づいてしまった僕は
でも他人よりも
君を愛している僕は

君がそれに気づくまで
待っていることにする

【瞬間】

ひとは　　タイミングで
恋をする

運命で決められた
相手なんていなくて

誰も彼もが
適当な相手を引っ掛けて
恋をしてる

胡散臭い笑顔で　　奴は
嘯いた

だからさ
俺にしなよ

君は俺の運命の相手
なんだからさ

大人しく引っ掛かって
くれないと困るんだ

いないと言った口で
何をほざくか

いや
そんな単語の羅列より先に言う言葉が　あるはずだ

手厳しいね

ヤツはひどく楽しげに
笑いかけてきた

【赤い】

空に赤い色が　零れていた
友人としての
好きなのか

家族に対する慈愛に似た
好きなのか

人間として　尊敬出来る
好きなのか

少なくとも
最後のはないかな
と思う

静夜に沈む夜想曲

【魅力】

君に贈るものを
選んでいたんだ

君はとても我儘で
融通が利かないから

気に入らなかったら
捨ててしまうだろう

それほど
仲の良くない友人は
苦笑した

彼の恋人は
慎ましやかなひとで

僕の言う君のようなひとが想像もつかないらしい

でもね
彼の首に巻かれた
赤いマフラーは
はっきり言って頂けない

彼は間抜けなサンタ
みたいで
君にも見せてやりたかった

慎ましやかなひとには
魅力を感じないよ

君も
間抜けなサンタより

贈りものに頭を抱える
僕の方が魅力的だろ

【兄弟喧嘩】

どちらが悪いかなんて
決まっている

悪いのは
いつだって俺

いや　　これは俺が
捻くれているわけじゃなく実際そうなんだ

奴は呆れるほど
真面目人間だから

自分勝手なことなんて
出来るはずもなく

大体俺がふっかけてる

まあ　奴が怒っても
恐くはない
元々垂れ目だしな

それなのに
負けるんだよな
何故か　　毎回

言っとくけど
俺が弱いわけじゃないぜ

奴以外には
負けたことなんて
ないからな

【だからね】

あのね
もうやめるんだ

彼女は
すまなささと　気不味さが半々の微笑みで

だからね
今まで　ありがとうね

待って
意味が分からないよ

だから、て何が
説明になってないよ

もうやめた後なんて
そんなの知らなかった

ああ　そっか

あなたとはそれほど
仲良くは
なかったんだね

【砂】

灼熱の太陽
何処までも続く路

緑地まであと少しだ
隊商の内の一人が呟く

ふと青い空を見上げると
黒い馬が翔んでいた

見事なもんだ
誰かが呟き

ありゃあ黒檀製に違いねぇ誰かが付け加えた

今日の夢は
また一段と変だな
と考える

湖藍の蝶の死骸

【代償】

僕は醜い

僕が君の悲しみに
涙を流したとしても

それは決して
君のためじゃない

その証拠に僕は今まで君に薄っぺらい言葉しか
かけてこなかった

楽な方ばかりを選んで
このざまだ

君は先に行ってくれ
僕の屍を踏みしだき

躊躇わずに行ってくれ

それが君の糧となることを願っている

【白昼夢】

夢を見たんだ

目が覚めたとき
暖かい涙が頬を伝っていた

ひどく幸せな夢だった
これ以上ないほど　幸せな

取り返しのつかない
場所にある夢だった

【兄】

二年と九ヶ月
先に生まれただけのくせに

いつだってそうだ
彼は

人好きのする笑顔
嘘のない性格
非のつけようのない人柄
誰にだって優しい

弟にだって　優しい

なのに何故か
俺は　あんたが
好きになれない

【区分】

男とか　女とか
大人とか　子供とか
白人とか　黒人とか

考えた奴は誰だ

俺は絶対に　死んだって
そんなことはしない

奴らがするのは
差別何かじゃない

狩だ

考えた奴らだけじゃない見ていただけのお前等も
何も出来なかった俺も
同罪だ

お前等の目は
暖かい日溜まりの中で
心地良さげに細まり

お前等の腕は
歓喜の声を上げながら
嬰児を抱きとめるだろう

変わらないんだ

お前等が見過ごした奴も
よく笑って
小さな幸せを噛みしめてた

確かに　違う部分もあっただがその溝を　何とかして埋めようと
していただろう

本当は分かってる

こんなものは
自分が何も
出来なかったことに対する
言い訳にすぎないんだ、て

翡翠の蛹の変容

【黒と青の線】

何でもないはずのことが
鋭いナイフのように

何度も　何度も
繰り返し　痛くて

あまりにも痛すぎて

目を閉じて　耳を妨いで

どうか
誰も入って来ないで、と

線引きをした

【質問と呟き】

嫌いなの　と訊かれて
分からない　と答えた

そういう意味じゃないよ
だって
本当に分からなかったんだ

【止めたのは】

時計の針が止まっていた

何かで　刺されたように

止めたのは　誰？

【一体】

一体
一体何処で
何を、
どうして、

いつも分からないそれは
何気ない一言だったりする

【感知】

今、嘘を吐いたでしょう？
そんな顔をしないで
別に　責めている
わけじゃないから

責めてわけでは、ね

淡水に棲む魚

【現状維持線】

本当に好きなら
そんなことしないよ

本当に好きなら
相手のことを大切にするはずでしょう？

君は分かっていない

本当に好きだから
こんなにも

余裕がないんだ

【利己的な犠牲】

君は僕を傷つけていいよ
僕は君を傷つけないけれど君は僕を傷つけていい
僕は

君のためなら何だってするだろう
腕が折れ　血が流れ

君を抱きしめることが
叶わなくなったとしても

最期のその瞬間まで
君だけを想っているよ

だから

どうか　僕を

見捨てないでくれないか

【一日の終わりに】

とても親切にされたんだ
小さな　本当に小さな

何でもないようなこと　だったけれど

タイミングが悪くて
お礼は言えなかった

一言だけでも
何か言えたら良かったのに

そんな後悔が　いつだって一日の終わりに一つ

【ただ優しく】

君を閉じこめようなんて
思えない

君に優しくするだけで
僕はひどく充たされる

隣を歩く　君の髪に触れて
時折
君の笑顔を向けられれば

それだけでいい

ただ優しくしたいと
強く思うんだ

これもまた　恋でしょう？
君は違うと　言うけれど

恋の仕方は
人それぞれでしょう？

【君が、】

君が好きだよ
と言ったら　君は

やめてよ

って笑った

無邪気な子供みたいに
君が好きだよ

なのに　君は
残酷な笑顔

どうしてかな
それすら　愛しいんだ

海の水が青い理由

【それは】

それは
それでいいんじゃないか、
と君は言った

ああ、わかったよ

ちょっとした失望

聞いてなんか
いなかったんだね

【春に】

花が　開くように
ぱらり、と
君の　読みかけの本の頁が
風に流される

【祈るような】

こっちを
見てくれないかな
そっと
祈るような気持ちで思う

【反動】

ちょっとしたことで
時折　泣きたくなる
というより
泣きたくなった時には
もう
泣いている

【目】

触れただけで
人が死んでしまうと
思っているみたいだね
まるで

もしくは

君の目に映る世界は
他の多くの人達の
持つものとは

違うのかもしれない

【疑問】

ごめんなさい　そんな
つもりじゃなかったの
じゃあ
どんなつもりだったの？

緑青の晴の熱帯魚

【水魚】

河が枯れ
地下の水が底を尽きたから僕は死ぬ

さようなら

どうか泣き止んでくれ

その涙で河が溢れ、
僕が流されてしまう前に

【今日は】

今日は雨が降りました
今日は花が咲きました
今日はあなたを
忘れることに決めました

今日は、今日は
どうすればいいですか

どうすることが
正しいですか

どうすることが
正しかったんですか

【次に】

綺麗ね

何が？
空よ　星が

月は？
それも

君は？

ええ、それも　少なくともあなたの好みには
合うみたい

【足跡】

同じ場所を歩いてきたわ

同じ刻に
同じ速さで　同じ路
同じように真剣な表情で

だから、
間違えてしまったのよ
まだ、わからないの？

ほら、見て
この足跡
逆を向いているでしょう？

【双子】

いらないわ、と
私は言ったの
いる、とあの子は
笑って言った

そんなものの
どこがいいの？

笑ってないで　答えてよ
あなたは似ている、と
言うけれど

全然、全く
分かってないのね

見てくれだけに
騙されないで

あなたのこと
嫌いになりたくないないの

砂漠の緑地に零れた水

【希う】

君は気づかない

交差し、
すぐさま離れる視線
張り詰めた空気
呼吸
落ちるため息
呼吸
指先が微かに

触れ合う

【朝】

毎朝、目覚めたら
大切なひとが
このセカイから消えていると思い込む

ようは慣れだよ
予行演習

だから俺は
脆く　崩れたりしない

【誰か】

誰かになんて
なってはいけないよ

君は　君だけは
変わらずに
そのままでもいいんだよ

【エスプレッソ】

苦い
ただ苦い味がした

目を塞ぐ
不器用な手が

大丈夫だよ、と囁いた
嘘は嫌いだ　それは

どれほど優しくても
苦い

【悪魔】

それは正義
それは思いやり

決めつけって良くないよね

意外とそうゆう処から
悪魔は生まれてるのかも

青い燐光　飛べない雨燕

【厳しいヒト】

時には　優しくするより
厳しくする方が難しいのは
知っているよ

優しい人には甘えがあって厳しい人には
それがないから

だけどね
その厳しさは

あまりにも鋭利だ

【人形】

君は
ひどく綺麗で
近寄りづらい

硝子細工のように
ひび割れ易く
触れることも難しそうで

まあ、触れたいとも
思わないけれど
そんな顔するなら　いっそ止めなよ　それ

【繰り事】

意味の理解できない
一定運動
それから
死んだように眠る

日々はその繰返し
だから誰かが誰かを
殺したり
酷い目に遭わせたり
するのも
道理かな
なんて
吐き気のする思考

【雪が】

雪が降っていて
綺麗だ
と呟く横顔を
無感動に眺めていた
綺麗なのは　きっと
君の目だ

綺麗なものを
綺麗だと捉えて
優しくすがめられた
その目

【あなたのこと】

一度だけ
深くひとを
傷つけたことがある

ほんの少し
傷つけばいいと
愚かにも

予想以上に深く抉られた
その傷を前に

ただ立ち尽くすことしか
できなかった自分は

あまりにも身勝手で

謝れなかったから
今でも
あなたのことを考えている
一生
何があっても忘れない
それはあなただけ

pistachio

森の緑がさざめいて
淡い緑の波が

躍動する

湖面に落ちた
一枚の葉がつくる
波紋のようでいて

剥離した
緑柱石の
欠片のようでもある

その色が
生きた緑、と呼ばれるのは

幾百の色を併せても

その一瞬の

光景すら

描ききることが
出来ないからだ

そう言って彼は笑い
悲しげにその瞳を伏せた

彼の目は澄んでいた
何もかもを映すように

その目は
あまりにも無垢で

あまりにも悲痛

そして
あまりにも美しかった

彼の画布に描かれた緑が

彼のいう
生きた緑でなくとも

その瞬間、
確かに
彼の目に映る

その色は
美しかった

flat day

ため息がでるほど
美しい軌跡を描き
その時々の空の色を帯びて跳んでいく

軽やかな余韻
寂しげな笑い声

騒がしさが虚しく
優しさが痛ましい

息もつけないほどの
不安と
得体のしれない
怯えに震え

糾弾を恐れて
罪悪感で埋もれそうな躰を抱きしめた

そんな時

跳びはね
一転
飛び散った欠片が

その頁を破り取り
花びらのように
紙片を撒き散らせながら

溢れでる
心地好い感情の奔流は

留めることなど
出来ずに

熔けでる

快も不快も入り雑じり
麻痺したような感覚の中

酔ったように笑う
潤んだ目に映る
何もかもが歪んでいて

苦しくはない
苦しくはないはずだ

自分に、言い聞かせた

葡萄石の結晶の欠片

【さよなら】

僕らは
いつだって
楽しくて　仕方なく
いつまでも　この時間を
手放したくなんて
なかったんだ

そんな子供染みた独白

【人を愛する】

人を愛するということは
自愛に似ている

そう思った俺では
駄目なんだ

幸せになんて出来ない
だから

手を振りほどいてくれ

【涙晴れる】

悲しさと
胸が潰れそうな悔しさ
唇を噛む

肩が震えて
上手く息が出来ている気がしなかった

平気だと
呟く声すら震えている

平気じゃ、ない
でも
緩く息を吐いて

あと少しでも
いいから

前へ

【檸檬水】

恋愛よりも
友愛の方が　下だなんて

決めつけるのは
酷くないか？

何かが　零れた

【水の中の悲鳴】

人魚よりも
君の方が透明で

きれい

ほら　泣かないで

泡になんて
なりたくないだろ？

【栗色】

ぴょんと　跳ねた髪

くしゃりと
乱したくなるような

太陽に透ける栗色

青灰の空に沈む色

【衝動】

目の縁が熱を帯びて
急激に

熱く
熱くなった

駆り立てられるように
手を伸ばし

君の腕をひく

【離さないように】

力ない僕の目を
真っ直ぐに射抜く君

離さないで

離さない
離せないよ

君の瞳が囁いた

【悪魔的】

端正に整った
君の笑み

唇の片端を吊り上げ
器用に微笑む

悪魔的な君

鋭いナイフの
切っ先のように危うげな君

【いつかの】

あんたの口にする
「いつか」は

胡散臭く
信じられない

だから
もう守らなくても　いい
あの時の約束なんて

「いつか」にいる
あんたの自由だ

【愛情】

俺は

君が好きなのかな

分からないのは
君が俺を好きなのか
分からないからだ

おかしい？

そんな俺を
おかしいと思う？

仕方ないよ
俺は人一倍
臆病なんだから

俺だけじゃないよ
誰だって傷つくのは

恐いんだ

赤い柘榴石の心臓

【もしかしたら】

もしかしたら　俺は
知らなかったのかも
しれない

あんたの　その目が
誰を追っているか
なんて

知りたくなかったのかも
しれない

【灰色】

俺の目に映るセカイは
いつだってひどく
残酷で

そこに
救いなんてものは
夢にもみれない

時間は停止し
雨は降り止まない
とうに
死んでしまっている
このセカイに

生きる彼らと俺

願わくば

灰色のセカイの
その先に

幸あれ

【コエ】

君の唇が
震えて
なのに
声が

零れ落ちることは
なかった
だから

俺は
ふり返らず
君に

さよなら
と笑ったんだ

【猫】

黒く
つややかな毛艶

誇り高い
孤高の
薄い背中

目を反らしてしまえば
今にも
消えてしまいそうで

なのに

紺碧の瞳と
ｂｏｔｔｌｅ　ｇｒｅｅｎの瞳は
それでも　なお

耀かしく

僕の胸を締めつける

冬の夜の凍えた囀り

【悲しくとも、笑え】

俺は
お前のその目が
心底嫌いだ

挑むように
何処までも鋭く
好戦的で生意気

何より　可愛くない

お前は
俺を軽んじすぎてる

だから
笑えよ　　お前は唯一
俺を笑える

悲しくとも　　笑え

俺の傍らで

【信じて】

疑り深い君
自信の無さが
そうさせてることは

理解っているよ
臆病で愛しい
そんな君だから

でも　少しは

僕を
そして
君自身を信じて

【明日までは】

好きとは
口にするけど
嫌いはないかな

気がつけば
いつの間にか
視界から消えている

追い縋ることが
出来ないほどの
速やかさ

苦しいのは
好きじゃない

君だけは
いつまでも
ずっと一緒に

あまりに空虚な言葉は
笑えるほど滑稽で
書き換える

少なくとも明日までは
俺の傍にいて

【好きだから】

どうして
あんなことをしたんだ？

彼女は表情を曇らせ
好きだから、と
悲しそうに

俺を好きでいることは
彼女にとって
悲しいことであるらしい

ちょっと傷つくな

【何故か】

何故
僕では　駄目だったのかな

君のことは少なくとも
嫌いじゃなかった

むしろ　気に入っていたよ
人間嫌いの僕にしては
上出来

でも　君には
分からなかったんだね

伝わらなかった
信じてなんてなかったんだ
最初から　最後まで
ずっと疑っていたの？

こんなにも
追いつめられた僕のこと

白詰草と白い爪先

【ひととき】

誰かの幸せが
誰かの不幸に繋がるなんて
そんなの
前々から知っていたよ

でもね
君が
それを言うの？

【明日】

来なくていいよ

そんなものは
今のままで十分
高望みはしない
何故？
俺は
そこまで飢えてはいないし
それに、
失うのが怖いから

【空と君】

空を突く君の指先
空を突く君のまなざし
ああ
すべてに君を連想する
俺は
何処かが異常なはずなんだ
それなのに

そんな俺にすら君は
空のように、
包みこむような
笑顔を向ける

【四つ葉のクローバー】

驚くほど不運な僕は
四つ葉になんて
お目にかかったことがない
笑っているように見えて
深く　落ち込んでいる僕
そんな僕に　奴は

目が悪いだけだろ　それにお前落ち着きないしな？

ゆっくり落ち着いて
気長に探せば

案外、見つかるもんだぞ

ああ
また君に救われた

【白雪】

真っ白　　まっさら
けぶるような

感覚を麻痺させ
視界を覆い

ただ　　しんしんと
降りつもる白さ

菫の空を泳ぐ水魚

【時々】

大丈夫？
訊きながら
どうしてこれほど
もどかしいのだろう、と
息を詰める

君が傷を負うことを
願ってなんていないけれど
それと同時に
どうでもいい　とも
ふと思ったりするんだ

ひとは所詮他人で
ひとは他人のことなど
気に留めたりしない

救いようのないほど
ただ淡々と

思う

【藍色】

藍色の空

まるで笑いながら
泣いているみたいな
曖昧な色

【アイとは】

身勝手な君
傲慢で不可侵

でも
愛してしまったら
おしまいだよね

愛することって
絶望なんだ

【雑踏にて】

雑踏の中
ぼんやりと
立ち尽くしていたんだ

俺は歩くのが
速いわけじゃないけれど
特別
遅いというわけでもない

人々は
忙しなく
通り過ぎる

なのに
俺は立ち止まったまま

どうしても
大人に成りきれずに

此処にいる
子供みたいに
泣きじゃくることも
柔らかい弱さを切り捨て
前に進むことも
出来ずに

【死】

死ね、って言われたんだ
もういいから
死ねよ
って
笑って

僕は傷ついてもいないし
悲しんでも
いないけれど

君に死んで欲しいと

思うほどには
憤ってる

湖底で途絶えた水路

【軽快な】

俺の吐く言葉は
軽い

知ってるよ　そんなの
吹けば飛ぶような
軽さだと

毎日毎朝
自己嫌悪に陥っているのは誰だと思う？

けれど
そんな軽すぎる言葉が

小さく
ほんの小さな音だとしても響くことがあるのだと
知ったから

だから俺は未だに
軽快に　ありのままで
笑えているんだ

【初対面】

何処かで会ったことある
そう感じる人間の大半は　初対面か
若しくは詐欺師だ

そういった人間は
いちいち
他人につけいるのが巧く

不相応に大人びて優雅
子供みたいに幼く残酷

【相反する】

あんたと俺は相容れない

あんたが黒なら
俺は白

あんたが青なら
俺は真っ赤だ

近寄るなよ
そうだ
怯えて後退れ

それが　正しい

俺は
あんたを
侵したかったわけじゃない

だからさ　これが
正解、だろ？

【最低な】

優しさなんて
要らない

ただ
目を反らさないで
俺を　見て

最低な部分も　弱さも
目を背けたくなるような
薄汚れた　涙も

全部が全部　俺だから

【あたしと今】

大声で笑うのは好き

泣き虫な奴らと勘違い男は死ぬほど嫌いで
そして

今この世界にいる全員が

大嫌い

だから嘲笑うの
可笑しくて、仕方ないと
口角を吊り上げて

笑うの

蔓延る蔦と黒猫の廃墟

【あなたに対して】

期待なんて
していないから

もう　いいよ

落とした言葉

それが
凶器になるなんて
一滴足りとも
考えていなかったんだ

【死んで】

死んで
生まれ変わるなら

君にはもう
二度と関わりたくないな

君の耳許で
囁く

【レンガ】

レンガの家を建てたの

これからは
二人で一緒に暮らさない？

赤く小さな家

今にも
壊れてしまいそうに幸せ

【恐怖に震える】

本当は
何もかも　怖い

笑顔も
優しい言葉も

湧きいでるような
好意すら

今が良ければ
それだけに

怖くて恐くて仕方ないんだ

だから
最低の状態に陥った時

初めて　安堵の息を吐く

【鳥】

空をね
飛んでいたら
墜ちたんだ

誰かが投げたハンガーに
激突

まったく
なんて事をしてくれたんだ
恥ずかしくて
痛くて
気分は最悪

今日はもう疲れたよ
明日は一日休むとしよう

赤く染まる椋鳥の住処

【凶器】

鈍器で
殴打され

動揺

ジリジリと後退さる
水音を立てて

鼓動が　跳ねた

【痛い、より】

幾度となく
突き刺される

何か意味が
あったのだろうか

棘を帯びた
不可思議なニュアンス

【拳銃】

加虐的な笑い方をする
彼

細く青白い
石膏の指先が、弾く

銃声が、響いた

【自堕落な生き方】

無理して　長く生きよう
なんて
思ってもいないから

毎日が
それなりに愉快で
おざなりに

霞むような
軽さであれば

それでいい
それだけで　いい

【擦過傷】

ひとを傷つけることは
ひどく厄介で、割に合わず
面倒だ

だから
傷つき易い人間は
避けて通るようにしている

だが　それでも
隣を通り過ぎたとき

少なからず
傷つくんだろうな

彼らも
俺も

青空から剥離した破片

【二月】

寒い
どうして　これほど
寒いのかな？

芯から　凍えてく感覚
痛みはない　けれど

無気力に

吐く息は　白い二月

【本当は】

答を無理に
捜す必要なんて
無くて

気づいていないだけで
それは傍に

目を閉じて
暗闇の中、
感じられるほど
すぐ傍に

【木の噺】

声が　　したんだ
視界を覆う
早緑の壁の
その先

見えていないはずの
向こう側に

君を、見た

【彼の手記】

整った
端正な筆跡だったよ

綺麗で
後腐れのない
足跡だ

好ましい

そこに立つそのひとは
俺とはまるで正反対だった

【卒業式】

辛気臭い雰囲気
まるで
葬式のような、

違う

そんな風に
怒らせるつもりも
悲しませるつもりも
無かったんだ

離れていっても
笑っていて欲しいと

俺を置き去りにしていく
君に心底願ってる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8924p/

水銀少年

2011年10月8日13時53分発行